複合動詞の意味記述に関する一考察

杉村　泰

DOI: 10.18999/stul.30.127

1. はじめに

V-V 型複合動詞(以下簡単に「複合動詞」と呼ぶ)は形式的に前項動詞(V1)の連用形に後項動詞(V2)が結合して一語の動詞のようになったものである。しかし、同じ複合動詞でもV1とV2の結合の仕方は一様ではなく、「嘆き悲しむ」は「嘆いて悲しむ」、「切り倒す」は「切ることによって倒す」、「食べ始める」は「食べることを始める」という意味を表すというように様々なものがある。この点で、複合動詞は本動詞(単純動詞)に比べて意味が重層的になる。そのため、複合動詞の意味を記述する場合には少なくとも次の①～⑤について見ておく必要がある。

① 前項動詞と後項動詞の意味的結合
- ・前項動詞と後項動詞が意味的にいかなる結びつきをしているか

(例)「裾を折り返す」は「裾を折って裏返す」という意味を表し、「相手の頬を殴り返す」は「(自分が殴られたので)自分も相手の頬を殴ってやり返す」という意味を表す

② 複合動詞と本動詞の意味的対応
- ・複合動詞とその後項動詞が本動詞として使われた場合の意味的な対応

(例)「V1-返す」と「返す」

③ 複合動詞の多義構造
- ・同じ後項動詞を持つ複合動詞間の意味的なネットワーク

(例)「(土を)掘り返す」、「(悪口を)言い返す」、「(盗品を)取り返す」、「(光が)照り返す」、「(本を)読み返す」など

④ 類義複合動詞の意味関係

・ある複合動詞と意味的に類似した複合動詞の意味の違い

（例）「取り返す」と「取り戻す」、「読み返す」と「読み直す」

⑤ 自他対応のある複合動詞の意味的対応

・後項動詞が有対動詞の場合の他動詞形と自動詞形の意味的な対応

（例）「V1−返す」と「V1−返る」

また、これら①～⑤のいずれとも関わることであるが、⑥のように複合動詞が使えない場合について記述することも必要である。とりわけ、日本語教育においてはどのような場合に複合動詞が使えるかだけでなく、どのような場合に複合動詞が使えないかが重要である。なぜならば、日本語学習者は「飲み込む」が言えるなら「*食べ込む」も言えるのではないか、「駆け上がる」が言えるなら「*走り上がる」も言えるのではないかと考える可能性があるからである。このような誤用を防いだり訂正したりするためには、使えない場合の記述が不可欠である。

⑥ 複合動詞が使えない場合

・V1+V2 結合や共起する名詞句の制限について

（例）「取り戻す」と「取り返す」は両方とも言えるのに、「買い戻す」は言えても「*買い返す」は言えないことや、「盗品を取り返す」は言えても「*青春を取り返す」は言えないことなど

以下の節では上の①～⑥の順に見ていき、最後に複合動詞「V1−返す」を例にして複合動詞の意味記述を試みる。

2. 前項動詞と後項動詞の意味的結合

複合動詞（V1+V2）は2つの動詞が結合して一語の動詞のようになったものである。しかし、その前項動詞（V1）と後項動詞（V2）の意味的な結合の仕方は様々である。この点について先行研究を概観しながら論じる。

寺村（1969）は V1 と V2 のそれぞれが「自立語として独立に使われる時の意味がそのまま

保持されているか、否か」(p.43)によって、次の(a)～(d)の4つのタイプに分類している。

(a) 自立Ｖ＋自立Ｖ(例:走リ去ル、持チアゲル)
　単に二つの動作が連結して表現されているもの
(b) 自立Ｖ＋付属Ｖ(例:走リ込ム、見上ゲル)
　第2の要素はふつう独立して使われない形であるか、もしくは独立して使われる時の意味を失ってしまい、単に前のＶのあり方を限定しているに過ぎない場合
(c) 付属Ｖ＋自立Ｖ(例:トリ押サエル、打チ眺メル)
　本来の実質的な意味を失い、接頭語化して、後半の実質的な意味を担うＶに何らかのいわばニュアンスを加える役目をしている
(d) 付属Ｖ＋付属Ｖ(例:トリナス、ノリ出ス)
　どちらが主要な意味を担うとも言い難く、むしろ一語として不可分離なもの

(寺村(1969)を整理したもの)

これに関して、山本(1984)は「寺村の分類法は、(中略)問題点は各要素が自立語として用いられている時の意味を保持しているか、もしくは失っているかをどのように判断するかが明確ではないことにある」(p.33)として、複合動詞の格成分が前項動詞および後項動詞とどのような対応関係を見せるかによって、複合動詞を格支配という客観的な基準で次のⅠ類～Ⅳ類に分類している。

Ⅰ類:複合動詞の格成分が前項動詞と後項動詞のそれぞれと対応する。
(例)子供が泣き叫ぶ { 子供が泣く / 子供が叫ぶ }　雪が降り積もる { 雪が降る / 雪が積もる }

Ⅱ類:複合動詞の格成分が前項動詞とは対応するが、後項動詞とは対応しない。
(例)部屋が静まり返る { 部屋が静まる / *部屋が返る }　雨が降り出す { 雨が降る / *雨が出す }

Ⅲ類:複合動詞の格成分が後項動詞とは対応するが、前項動詞とは対応しない。
(例)不幸が打ち重なる { *不幸が打つ / 不孝が重なる }　期限が差し迫る { *期限が差す / 期限が迫る }

Ⅳ類：複合動詞の格成分が前項動詞と後項動詞のいずれとも対応しない。

（例）味が引き立つ ｛*味が引く　*味が立つ　　良夫が取り乱す ｛*良夫が取る　*良夫が乱す

（山本（1984）を整理した南（2015）より）

その上で山本（1984）は「寺村のいう「付属」語化あるいは従来からよくいわれてきた動詞の接頭・接尾語化という現象は、実は格支配能力の欠落であるということも指摘した」（p.47）と述べている。ただし、山本（1984）自身も「この分類によっても処理できない複合動詞の例がまだいくつかある」（p.47）として、「男ガ（一晩中）飲ミ明カス＝男ガ（酒ヲ）飲ム＋男ガ（夜ヲ）明カス」や「正夫ガリンゴニカジリツク／正夫ガリンゴ｛*ニ/ヲ｝カジル／*正夫ガリンゴ｛ニ/ヲ｝ツク」などの例があることを指摘している。しかし、このような例の特殊性について考える上でも、V1 と V2 の格支配を記述することは複合動詞の意味記述にとって重要である。

一方、森田（1990）は同じ V2 を持つ複合動詞でも「その動詞の表す意味の転化の度合い、両語の意味関係の在り方」（p.286）に違いのある例として、次の（ア）～（ウ）の「V1−落とす」の例を挙げている。

（ア）「落とす」本来の意〈落下サセル〉をそのまま留めているもの「…して落とす」と訳せる（「突き落とす」は「突いて落とす」の言い換えが可能）。
例　突き落とす、撃ち落とす、切り落とす、叩き落とす

（イ）「落とす」の意味にやや発展がみられるが、やはり「…して…する」の意味関係をとるもの（「泣き落とす」は「泣いて落とす」とは言えない）。
例　攻め落とす、泣き落とす、くどき落とす、産み落とす

（ウ）「落とす」の意味がさらに発展し（漏ラスの意）、「…することを漏らす」の意味関係となるもの。
例　言い落とす、聞き落とす、見落とす、読み落とす

（森田（1990）より）

その上で森田（1990）は複合動詞の V1 と V2 の複合にはいくつかの段階があるとして、次の第1段階～第5段階に分類している。

第1段階　並列関係

両動詞が対等の関係で並列する「…して…する」形式

〈動作・作用の順次性〉「…してから…する/…になってから…になる」

（例）追いすがる、寄りすがる、燃え移る

〈手段・方法〉「…することによって…する」

（例）押しあける、言い広める、踏み固める、掃き清める、なぐり殺す

〈行為の結果〉「…することで…することになる/…した結果…となる」

（例）寄り集まる、言い当てる、食い荒らす、降り積もる、泣きぬれる、着ぶくれる

〈イコールの関係〉「…すること、…すなわち」

（例）貸し与える、切り刻む、言い聞かせる、書きしるす

〈動作の状態〉「…し、かつ…する」「したり…したりする」または「…ながら…する」「…ながら…となる」

（例）照り輝く、鳴り響く、恋い焦れる、驚きあきれる、泣き叫ぶ、咲き匂う

（例）浮かれ歩く、遊び暮らす、泣き明かす

第2段階　主述、補足の関係

「…することが…だ」「…することが…となる」

（例）思い余る、吹き荒れる、売れ残る

「…することに…だ」「…することに…となる」

（例）見飽きる、し慣れる、読みふける

「…を…する」

（例）書き誤る、売り急ぐ、見交す

第3段階　具体的意味から抽象的意味へ

主述関係や補足関係を取る複合動詞のうち、複合するどちらか一方の動詞が本義から離れて転義的に用いられている例

（例）降りだす、書きあげる、塗りかえす、走りぬく、やりつける、やりかける、歩きとおす、言いかねる、言いくるめる、言いまくる

第4段階　造語成分への移行

下線部が、それ自体独立した動詞としては用いられないが、複合語の中で生き残り、しかも実質的意味をまだ残している場合

（例）考え<u>あぐねる</u>、言い<u>そびれる</u>、言い<u>ならわす</u>

第5段階　実質的意味から形式的意味へ

実質的意味を失い、形式化された例

（例）叱りとばす、わめきたてる、恐れいる、どなりちらす、かき曇る、おし進める、うち続く

（森田（1990）より抜粋して整理した）

森田（1990）の示した5段階は暫定的なものであり、実際にははっきりと段階を区切ることは困難である。しかし、複合動詞の V1 と V2 の複合に様々なタイプのものがあることを指摘している点は重要である。複合動詞の意味記述をする際には、寺村（1969）や山本（1984）の4分類をさらに進め、森田（1990）のように細かな分類をすることが必要である。また、上の「N1−落ちる」のように同じ V2 を持つ複合動詞における多義的意味の違いについても記述することが必要である。

また、由本（1996）は語彙的複合動詞における複合動詞を成す2つの動詞の意味関係について、概ね次の5つのタイプのどれかに分類されるとしている。

A. 並列関係：V1＋V2 ⇒ LCS1 AND LCS2 (t1＝t2)

同じイベント構造の LCS で表されるもの同志(ママ)の合成に限られ、項の同定も同じ θ 役割同志でしかもれなく行われなければならない

e.g. 請い願う、忌み嫌う、思い描く、あわてふためく、泣き叫ぶ、耐え忍ぶ、驚きあきれる、恐れおののく、恋い慕う、ほめ讃える

B. 付帯状況：V1＋V2 ⇒ LCS2 WHILE LCS1 (t1＝t2)

項の同定は同じ θ 役割のもの同志に限られ、付帯状況の解釈が不可能なアスペクト素性を含んだり、結果状態に焦点がある V1 だと容認されにくい

e.g. 譲り渡す、払い戻す、遊び暮らす、待ち暮らす、這い寄る、すすり泣く、群れ遊ぶ、笑いころげる、降り注ぐ、並び立つ

C. 手段・様態：V1＋V2 ⇒ LCS2 BY LCS1 (t1≧t2)

意図的行為を表す動詞（LCS では CONTROL 関数で表される）同志

e.g. 切り倒す、吸い取る、追い払う、追い抜く、蹴り倒す、勝ち取る、飲み倒す、飲み干す、寝取る、泣き落とす、競り落とす、泣きはらす、言い負かす、笑い飛ばす

D. 因果関係:V1＋V2 ⇒ LCS2 FROM LCS1 (t1≧t2)
V2 は状態変化を表すもの(LCS では BECOME 関数で表される)に限られる
e.g. 着膨れる、遊びくたびれる、泣きぬれる、溺れ死ぬ、流れ着く、降り積もる、抜け落ちる、寝静まる、逃げ失せる、飲みつぶれる

E. 補文関係:V1＋V2 ⇒ [LCS2 ... [LCS1] ...]
V2 は LC に変項として Event 項を含む他動詞か非対格自動詞
e.g. 響き渡る、知れ渡る、見逃す、読みさす、書き落とす、使い果たす、沸き返る、使いこなす、寝付く、見落とす、呼び習わす

(由本(1996)より抜粋して整理した)

語彙的複合動詞と統語的複合動詞の区別は必ずしも容易ではないが、このように V1 と V2 の意味関係を捉えることは、複合動詞の意味記述にとって重要なことである。語彙概念構造を使った記述は、中国語など他言語の V1+V2 結合と比較する際にも有効であり、学習者の母語と対比した複合動詞の意味記述に応用することができる。

その他、石井(2007)は「複合動詞が、動詞のアスペクトおよびヴォイスにかかわるカテゴリカルな語彙的意味のくみあわせを土台にして形成されるという見方」(pp.49-50)を取り、「複合動詞形成の《アスペクト・ヴォイス》モデル」を提唱している。複合動詞の V1+V2 結合についてアスペクトやヴォイスの観点から論じることはそれまでの先行研究でも行われていたことであるが、これを統一的に考えることにより複合動詞の類型化と体系的な記述が可能となる。

以上見てきたように、複合動詞の意味の記述においては、前項動詞と後項動詞がいかなる関係(格支配、アスペクト、ヴォイスなど)によって結合しているのかを見ることが必要である。

3. 複合動詞と本動詞の意味的対応

複合動詞の意味記述においては複合動詞(V1+V2)とその後項動詞(V2)が本動詞として使われた場合の違いについても見る必要がある。例えば、(1a)は本動詞も複合動詞も使われるが、(1b)は本動詞しか使われず、(1c)は複合動詞しか使われない。このように本動詞と複合動詞には取りうる名詞句に違いがある。

(1)a. 硬い肉を{切る/噛み切る}。
b. スタートを{切る/*走り切る}。
c. マラソンコースを{*切る/走り切る}。

次の(2a)の「直す」は一度修理することしか表さないが、「修理し直す」は一度修理したものを再度修理するという意味を表すという違いがある。もし一度の修理について二つの動詞を複合させて言いたい場合は、「修理して直す」のように「V1 テ V2」という形にしなければならない。また、(2b)は複合動詞しか使われず、(2c)は本動詞しか使われないという違いがある。

(2)a. 壊れた車を{直す/修理し直す/修理して直す}。
b. 別の店で酒を{*直す/飲み直す}。 ／ 患者の容体が{*直す/持ち直す}。
c. 機嫌を{直す/*戻し直す}。

次の(3a)と(3b)を比べると、本動詞の「乗る」は対象にヲ格を取るが、複合動詞の「乗り回す」は対象にニ格を取るという違いがある。

(3)a. 車に{乗る/*乗り回す}。
b. 車を{*乗る/乗り回す}。

さらに(4a)と(4b)を比べると、本動詞の場合は他動詞形の「出す」は使えず、自動詞形の「出る」しか使えないのに対し、複合動詞の場合は V1 に「飛ぶ」が来ると V2 は他動詞形の「出す」が付き、V1 に「走る」が来ると V2 は自動詞形の「出る」が付くという違いがある。

(4)a. 子供が急に車道に{*出した/飛び出した/*走り出した}。
b. 子供が急に車道に{出た/?飛び出た/走り出た}。

以上に示したように、複合動詞と本動詞は意味的に必ずしも単純な一対一対応をしているわけではない。したがって、これらについて一つ一つ丹念に記述しながら、性質の似たもの同士いくつかのパターンに分けることが必要である。

4. 複合動詞の多義構造

複合動詞の中には「V1−始める」や「V1−疲れる」（例外的に経済用語の「（株が）売り疲れる」のようなものもある）のようにほぼ単義的な意味しか持たないものもあれば、「V1−込む」、「V1−上げる」、「V1−かける」、「V1−落とす」、「V1−返す」のように V1 に来る動詞の違いによって多義的な意味を持つものもある。これらは(5)〜(9)のように V2 に来る本動詞の多義性と相俟って様々な意味を担っている。

(5)「駆け込む」（内部移動）、「冷え込む」（濃密化）、「眠り込む」（固着化）…
(6)「持ち上げる」（上昇）、「作り上げる」（完成）、「（声を）張り上げる」（極度）…
(7)「立てかける」（依拠接触）、「笑いかける」（心理的志向）、「食べかける」（始動）…
(8)「突き落とす」（落下）、「競り落とす」（入手）、「見落とす」（失敗）…
(9)「掘り返す」（反転）、「照り返す」（反射）、「繰り返す」（反復）…

多義的な複合動詞の場合、いかなる V1 が来た場合にいかなる意味になるのか、多義的別義間の意味的ネットワークがどのようになっているのかを記述する必要がある。これに関しては、森田（1989）や姫野（1999）をはじめ、斎藤（1985）の「V1−返す」、南（2015）の「V1−あげる/V1−あがる」など多くの研究がある。今後はこれらの研究成果を石井（2007）の「複合動詞形成の《アスペクト・ヴォイス》モデル」のような統一的な枠組みで捉え、複合動詞全体の体系化を図っていくことが必要である。

ところで、次の(10a)と(10b)を比べると、本動詞の「住む」が単にある場所に居住することを表すのに対し、「住み込む」は他人の家に長期間住み続けながらそこで仕事や勉強をすることを表すという違いが見られる。しかし、「－込む」の意味について「内部移動」、「濃密化」、「固着化」などのラベルを張るだけでは、日本語非母語話者は「長くその場所に住み続けていれば『実家に住み込んでいる』と言えるのではないか」と考えてしまうことになる。したがって、複合動詞の意味記述においては各「－V2」の意味だけでなく「V1+V2」全体の意味についても注意を払い、使い方を間違えやすいものについては誤用例を示しながら個別に説明する必要がある。

(10)a. 彼は生まれたときからずっと実家に{住んでいる/*住み込んでいる}。
b. 彼は店長の家に{*住んで/住み込んで/住みながら}働いている。

また、複合動詞の多義には「－V2」の多義のみでなく、同一「V1+V2」の多義についても見る必要である。たとえば、同じ「使い込む」でも(11a)のように対象に道具が来ると、その道具を十分に使って馴染ませることを表すのに対し、(11b)のように対象に金銭が来ると、必要以上に予算を使いすぎたり、他人の金や公金を着服したりすることを表すという違いがある。また、同じ「置き忘れる」でも、(12a)は「バッグを置いたまま、持ってくるのを忘れる」という意味を表すのに対し、(12b)は「花瓶を置くことを失念する」という意味を表すという違いがある。

(11)a. 革製品は使い込むほどに味が出る。
b. 彼は会社の金を使い込んで解雇された。
(12)a. 彼女はトイレにバッグを置き忘れた。
b. 彼女は会場準備でテーブルに花瓶を置き忘れた。

このように複合動詞の多義に関しては、「－V2」の多義と「V1+V2 全体」の多義の二段階に分けて記述することが必要である。

5. 類義複合動詞の意味関係

本動詞の場合と同様に、複合動詞も類義複合動詞の意味の違いを比較することにより、その意味が明確になる。たとえば、「V1-忘れる」、「V1-落とす」、「V1-漏らす」はいずれも行為の失敗を表す点で共通している。しかし、(13a)～(13c)の例を見ると、「V1-忘れる」は当該の行為をすることを失念したことを表すのに対し、「V1-落とす」と「V1-漏らす」は当該の行為をしようとはしたものの、思い通りの結果が得られなかったことを表している。また、「V1-落とす」と「V1-漏らす」を比べると、「V1-落とす」は対象を固体的に捉え、行為に失敗した結果それが外に取り残されてしまうイメージなのに対し、「V1-漏らす」は対象を液体あるいは気体的に捉え、行為に失敗した結果それを外に逃がしてしまうイメージであるという違いがある（杉村（2006c, 2007）参照）。

(13)a. 昨日ラジオを{聞き忘れた/*聞き落とした/*聞き漏らした}。
b. 彼は早口なので重要な個所を{*聞き忘れた/聞き落とした/聞き漏らした}。
c. 先生の話を一言も{*聞き忘れ/*聞き落とさ/聞き漏らさ}なかった。

この他、事態の開始を表す「V1-始める」と「V1-出す」、事態の完遂を表す「V1-切る」と「V1-尽くす」、行為の反転を表す「V1-返す」と「V1-戻す」など、類義複合動詞の意味の違いを分析することにより、各複合動詞の意味の違いが明らかとなる。

6. 自他対応のある複合動詞の意味的対応

(14)～(17)のように、有対動詞の「直す/直る」、「戻す/戻る」、「残す/残る」、「返す/返る」などは「車を直す/車が直る」のように基本的に自他の対応をなすのに対し、複合動詞の「V1-直す/V1-直る」、「V1-戻す/V1-戻る」、「V1-残す/V1-残る」、「V1-返す/V1-返る」などは「車を作り直す/*車が作り直る」のように自他の対応をなしにくい。これに関して杉村(2009b)では、影山(1993)の「他動性調和の原則」や松本(1998)の「主語一致の原則」を引いて分析している。

(14)a. 車を直す/車が直る
b. 車を作り直す/*車が作り直る(「作り直される」は可)
c. 彼を直す/彼が直る
d. *彼を開き直す(「開き直らせる」は可)/彼が開き直る
(15)a. 本を戻す/本が戻る
b. 本を買い戻す/*本が買い戻る(「買い戻される」は可)
c. 彼を家に戻す/彼が家に戻る
d. *彼を家に舞い戻す(「舞い戻らせる」は可)/彼が家に舞い戻る
(16)a. 思い出を残す/思い出が残る
b. 思い出を書き残す/*思い出が書き残る(「書き残される」は可)
c. 彼を残す/彼が残る
d. *彼を戦争で生き残す(「生き残らせる」は可)/彼が戦争で生き残る

(17)a. お歳暮を返す/お歳暮が返る

b. お歳暮を送り返す/*お歳暮が送り返る（「送り返される」は可）

c. *彼に後ろを返す/??彼が後ろを返る

d. *彼に後ろを振り返す（「振り返らせる」は可）/彼が後ろを振り返る

一方、次の(18)～(20)のように複合動詞の自他が対応する例もある。このような例に関しては影山（1993）や松本（1998）など多くの先行研究で議論されている。これについても複合動詞の多義構造と絡めながら、いかなるV1+V2 結合の場合に自他の対応をして、いかなるV1+V2 結合の場合に自他の対応をしないか、さらに自他の対応をする場合としない場合それぞれの要因についてより明確で統一的な説明が期待される。

(18) ロケットを打ち上げる/ロケットが打ち上がる（「打ち上げられる」も可）

(19) 光を照り返す/光が照り返る（「照り返される」も可）

(20) 紙を折り曲げる/紙が~~折り曲がる~~（「折り曲げられる」も可）

7. 複合動詞が使えない場合

以上、2節から6節で論じてきたことに共通して言えることであるが、複合動詞の意味記述において「いかなる場合に複合動詞が使えるか」ということと同時に「いかなる場合に複合動詞が使えないか」ということを明示することが重要である。この点で V1+V2 結合の規則を指摘した影山（1993）の「他動性調和の原則」や松本（1998）の「主語一致の原則」は重要である。ただし、これらの規則は複合動詞全体の V1+V2 結合の一般的傾向を示したものなので、今後は各「－V2」ごとに詳細な記述をしていく必要がある。

複合動詞が使えない場合を記述することは、とりわけ日本語教育において有益である。なぜならば、学習者は母語の直観が働かないため、「殴り返す」が言えるなら「*買い返す」も言えるだろう、「飲み込む」が言えるなら「*食べ込む」も言えるだろう、「駆け上がる」が言えるなら「*走り上がる」も言えるだろうと考える恐れがある。このような誤用を防いだり訂正したりするためにも、複合動詞が使えない場合の記述が必要となる。

8. 複合動詞「V1−返す」の意味記述

本節では以上に論じたことを踏まえて、複合動詞「V1−返す」の意味記述を試みる（詳細は杉村（2006a, 2006b）参照）。まず、CD−ROM 版『新潮文庫の 100 冊』を利用して「V1−返す」の V1 にいかなる動詞が来やすいかを調査した。その結果を表1に示す。

コーパス CD−ROM 版『新潮文庫の 100 冊』

- 日本人作家による 67 冊を対象
- 名詞の「繰り返し」などは含まない。ただし「繰り返し（説明する）」のような副詞的な連用形は含む。
- 「聞く」、「訊く」、「きく」のように表記に揺れのあるものは一つにまとめてある。

表1 『新潮文庫の 100 冊』に出現する「V1−返す」の出現数（異なり語数 61 語・全 1,879 例）

	V1−返す	出現数		V1−返す	出現数		V1−返す	出現数
1	繰り返す	747	16	送り返す	13	31	殴り返す	6
2	引き返す	304	〃	吹き返す	〃	〃	握り返す	〃
3	思い返す	149	18	どなり返す	12	33	叩き返す	5
4	聞き返す	108	〃	照り返す	〃	〃	巻き返す	〃
5	見返す	64	20	蒸し返す	11	〃	ほじくり返す	〃
6	言い返す	51	21	混ぜ返す	9	36	投げ返す	4
7	読み返す	46	22	打ち返す	8	〃	奪い返す	〃
8	はね返す	42	〃	弾き返す	〃	〃	見つめ返す	〃
9	問い返す	33	〃	盛り返す	〃	39	笑い返す	3
10	追い返す	29	〃	睨み返す	〃	〃	微笑み返す	〃
11	取り返す	28	26	切り返す	7	〃	辿りかえす	〃
12	折り返す	21	〃	叫び返す	〃			
13	押し返す	20	〃	呼び返す	〃			
14	突き返す	16	〃	頷き返す	〃			
〃	掘り返す	〃	〃	やり返す	〃			
42	し返す、斬り返す、射返す、蹴返す、いじめ返す、くすぐり返す、（ボートを）抜き返す、（電話を）かけ返す、眺め返す、訊ね返す、訴え返す、（ノートを）めくり返す、調べ返す、こね返す、当て返す、踏み返す、（雷が）鳴り返す、煮返す、（はらわたを）煮えくり返す、（頁を）はぐり返す（各1件）							

次に、本動詞「返す」と複合動詞「V1-返す」の意味的対応を表2に示す。これを見ると、「返す」と「V1-返す」は②の「畑の土を返す」と「畑の土を掘り返す」のように対応している場合もあれば、①の「カードを表に返す」と「*カードを表に向け返す」や⑪の「*失敗を返す」と「失敗を繰り返す」のように対応していない場合もあることが分かる。

表2 本動詞「返す」と複合動詞「－返す」の意味的対応

本動詞「返す」	複合動詞「V1-返す」
①物の表裏を反転させる カードを表に返す。掌を返す。 （※ ひっくり返す、裏返す、覆す、翻す）	*カードを表に向け返す。
②内部のものを表面に現す（耕す） 畑の土を返す。 ズボンの裾を返す。	①（掘り起こして）内部のものを表面に現す 畑の土を掘り返す。（鋤き－、ほじくり－、*耕し－） …「耕す＝田返す」→「*田返し返す」 ズボンの裾を折り返す。（*曲げ－）
③元の状態に戻す 契約を白紙に返す。汚れた川を元に返す。	*契約を白紙に戻し返す。（*洗い－）
④返却する 掘った土を穴に返す。（戻す） お歳暮を（受け取らずに）返す。 借金を返す。	②～して返却する 掘った土を穴に埋め返す。（埋め戻す） お歳暮を（受け取らずに）送り返す。（突き－） ?借金を払い返す。
⑤返礼する、返信する（モノ対象） お歳暮（手紙）を返す。恩（仇、恨み）を返す。	*お歳暮（手紙）を送り返す。（*買い－、*報い－）
⑥相手から受けた行為に対して、それに応ずる行為をする（コト対象） 挨拶（言葉、視線、笑み）を返す。 拳骨（蹴り、頭突き）を返す。	③相手から受けた行為に対して、それに応ずる行為をする（コト対象） 悪口を言い返す。（聞き－、見－、睨み－、笑い－） 相手の頬を殴り返す。（蹴り－、投げ－、切り－） 盗品を取り返す。（奪い－、綱を引き－）

⑦(こちらに向かってくる物を)反転させる 飛んできた球を返す。	④(こちらに向かってくる物を)反転させる 飛んできた球をはね返す。(はじきー、打ちー)
*敵を返す。	⑤(こちらに向かってくる人を)反転させる 敵を追い返す。(射ー、押しー)
*味方を返す。(cf.「帰す」)	⑥(向こうに向かっていく人を)元来た方向へ戻す 味方を呼び返す。(連れー)
*日の光が返す。	⑦反射する 日の光が照り返す。
⑧(人が)元来た方向へ戻る 踵を返す。歩みを返す。身を返す。	⑧(人が)元来た方向へ戻る 道を引き返す。(折りー、辿りー)
⑨(自然現象が)元来た方向へ戻る 波が返す。	⑨(自然現象が)元来た方向へ戻る 波が寄せ返す。風が吹き返す。
*勢力を返す。	⑩(衰えた勢いを)元の好い状態に戻す 勢力を盛り返す。(巻きー)
*風邪が返す。	(病気、天候、問題が)元の悪い状態に戻る (風邪がぶり返す)
*失敗を返す。 ?息を返す。	⑪もう一度(何度も)同じ行為をする(可逆) 失敗を繰り返す。(思いー、読みー、見ー、煮ー) *夕飯を食べ返す。(*遊びー、*結婚しー)(不可逆) 息を吹き返す。前の問題を蒸し返す。

次に、「V1−返す」の多様な意味のネットワークについて考える。これに関しては斎藤(1985)に記述があるが、もう少しすっきりと整理できると思われる。そのため、表1や表2の内容を勘案して、①反転物が「相手側に返っていく」のか「相手側から返ってくる」のか、②反転物が「コト」なのか「対象」なのか「主体」なのか、③他動詞的な「〜を V1−返す」なのか自動詞的な「〜が V1−返す」なのかという三つの基準を立てて、「V1−返す」の多様な用法を次の図のように整理した。

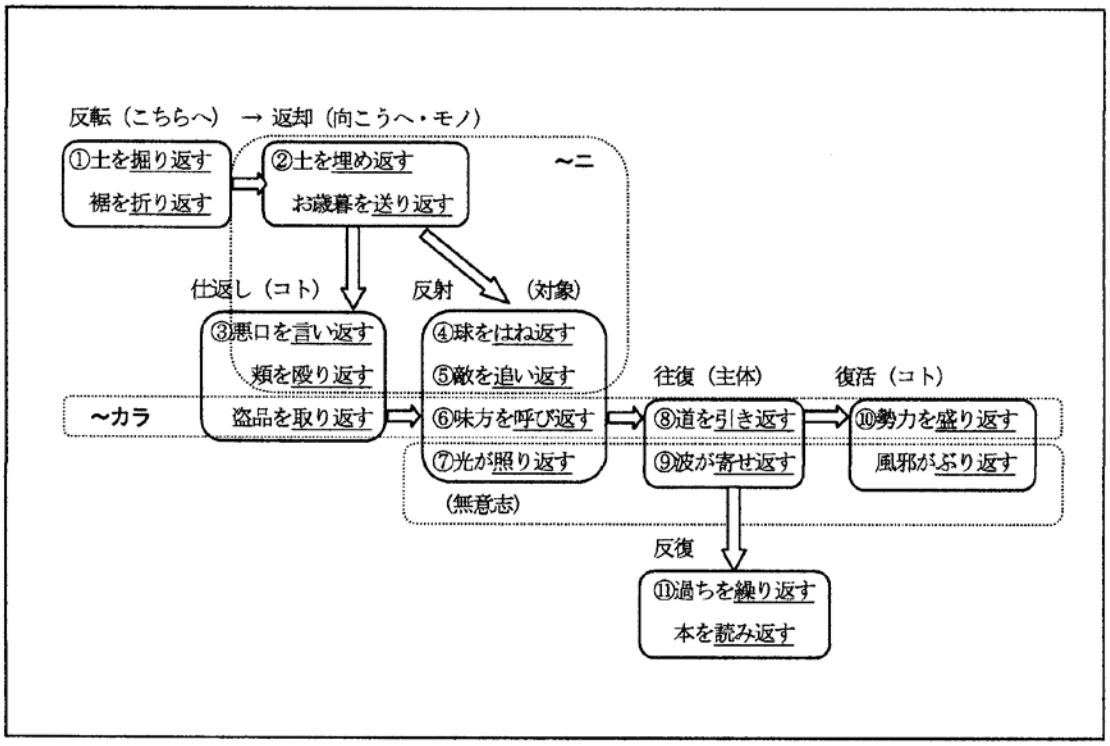


図 「V1-返す」の多義構造

このうち③の「取り返す」は対象の復帰を伴う点で「取り戻す」と類似した意味を持ち、⑪の「読み返す」は動作の反復を伴う点で「読み直す」と類似した意味を持っている。しかし、③の「V1-返す」は対象の復帰というよりは相手にされたことに対する「仕返し」の意味で使われる表現であるのに対し、「V1-戻す」は V1 で表される手段によって対象を元の位置に復帰させることを表す表現であるという違いがある。すなわち、「取り返す」は相手に取られたコトに対する主体の「仕返し」を表すのに対し、「取り戻す」は主体から離れていったモノを主体の手元に戻すという「原状復帰」に焦点がある。そのため、(21)のように略奪者がいる場合には両方使えるが、(22)のように対象がひとりでに主体から抜け出た場合には「取り戻す」しか使えないのである。

(21)a. 盗まれたものを取り返す。（相手への仕返し）
　　b. 盗まれたものを取り戻す。（対象の原状復帰）
(22)a. ??{青春/信頼/輝き}を取り返す。
　　b. {青春/信頼/輝き}を取り戻す。（対象の原状復帰）

一方、⑪の「読み返す」と「読み直す」の場合、「読み返す」は「波が寄せ返す」からの派生として捉えられ、読むという行為を再度繰り返すことを表すだけなのに対し、「読み直す」は「直す」の持つ修正意識が加わり、単に同じ行為を繰り返すだけではなく、一回目より二回目の方が質的に高いレベルの読み方をするという意味が加わる。

(23)a. もう一度本を読み返す。(元に戻ってもう一度読む)
　　b. もう一度本を読み直す。(読み方を改めてもう一度読む)

次に他動詞形の「V1−返す」と自動詞形の「V1−返る」の意味的対応について見る。複合動詞「V1−返る」には以下の7つの用法があるが、いずれも物の表裏が反転することを表す本動詞「返る」からの派生として考えられる。このうち(24)〜(26)の「V1−返る」は対応する「V1−返す」があるのに対し、(27)〜(30)の「V1−返る」は対応する「V1−返す」がない点で違いがある。詳しい議論は杉村(2009a)でしたので省略するが、自他対応の V2 を持つ複合動詞の場合、本動詞の自他対応と複合動詞の自他対応の双方を分析することにより、複合動詞の意味をより明確に説明することができる。

(24) プラスチックの下敷きが熱で反り返る。(屈曲) (→「(体を)反り返す」)
(25) ズボンの裾が外側に折り返っている。(反転) (→「(裾を)折り返す」)
(26) ボールが木に当たって跳ね返る。(反射) (→「(ボールを)跳ね返す」)
(27) 彼は別れ際にふとこちらを振り返った。(顧視) (→「*振り返す」)
(28) 彼は死の淵から生き返った。(復活) (→「*生き返す」)
(29) 彼は初心に立ち返った。(復帰) (→「*立ち返す」)
(30) 日曜日は広場に人が溢れ返っている。(極限) (→「*溢れ返す」)

以上のように「V1−返す」の意味について見る際、「V1−返す」が使える場合のみでなく、「V1−返す」が使えない場合についても目配りが必要である。表2の中にも書き込んであるように、「畑の土を掘り返す」や「畑の土を鋤き返す」とは言えても「*耕し返す」とは言えないといった V1+V2 結合における V1 の制限や、「盗まれたものを取り返す」とは言えても「*青春を取り返す」とは言えないといった共起する名詞句の制限についても、一つ一つ丁寧に見ていくことが必要である。

9. おわりに

以上、本稿では複合動詞の意味の記述において少なくとも次の6つの点に留意する必要があることを指摘した。

① 複前項動詞と後項動詞の意味的結合
② 複合動詞と本動詞の意味的対応
③ 複合動詞の多義構造
④ 類義複合動詞の意味関係
⑤ 自他対応のある複合動詞の意味的対応
⑥ 複合動詞が使えない場合

複合動詞は単に二つの動詞を足した意味を表すわけではなく、その掛け合わせ方の違いによって様々な意味を担うようになる。しかし、それぞれが全く別々の複合の仕方をしているわけではなく、いくつかの類型に分けられることも事実である。これらの類型をいかに設定するかということと、どこまで個別の意味記述を詳しく行うかということが複合動詞の意味記述にとって問われ続ける課題である。

［参考文献］

石井正彦（2007）『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
斎藤倫明（1985）「複合動詞後項の接辞化 ―「返す」の場合を対象として―」、『國語學』140 集、pp.120-132（左 pp.1-13）、國語學會
杉村 泰（2006a）「本動詞「返す」と複合動詞「－返す」の意味の対応について」『ことばの科学』第 19 号, pp.157-165, 名古屋大学言語文化研究会
杉村 泰（2006b）「複合動詞「－返す」の多義分析」『日語教育』第 38 輯, pp.139-159, 韓国日本語教育学会
杉村 泰（2006c）「コーパスを利用した日本語の複合動詞「－忘れる」、「－落とす」、「－漏らす」の意味分析」『日語教育』第 34 輯, pp.63-79, 韓国日本語教育学会

杉村　泰(2007)「複合動詞「－忘れる」、「－落とす」、「－漏らす」の用法」『日語学習与研究』2006 年第4期(総第 127 期), pp.1-6, 中国日語教学研究会(編), 对外経済貿易大学

杉村　泰(2009a)「コーパスを利用した複合動詞「－返る」の意味分析」『言語文化研究叢書』8, pp.77-91, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科

杉村　泰(2009b)「日本語の複合動詞における対称性の破れと回復」『日語研究論文集 ―日語研究的新視野―』, pp.69-94, 大葉大學應用日語學系(編), 致良出版社

寺村秀夫(1969)「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト ―その一―」『日本語・日本文化』第1号, pp.32-48, 大阪外国語大学研究留学生別科

姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

松本　曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』第 114 号, pp.37-82, 日本言語学会

南　明世(2015)『「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語の複合動詞「V1-あげる」「V1-あがる」の習得研究」』名古屋大学修士学位論文

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店

森田良行(1990)『日本語学と日本語教育』凡人社

山本清隆(1984)「複合動詞の格支配」『都大論究』21 号, pp.32-49, 東京都立大学

由本陽子(1996)「語形成と語彙概念構造 ―日本語の「動詞＋動詞」の複合語形成について―」『言語と文化の諸相:奥田博之教授退官記念論文集』, pp.105-118, 英宝社

ことばの科学

STUDIA　LINGUISTICA

第 30 号

2016 年 12 月 10 日　印刷

2016 年 12 月 15 日　発行

編集兼発行者

名古屋大学言語文化研究会

印刷　名古屋大学生協 印刷部

ISSN 1345-6156